

# 雲南でのトウヨウミツバチ とキンリョウヘン (ラン) の探査行

福田 道弘

キンリョウヘンが開花期にニホンミツバチとくりひろげる特異な現象に興味をもつようになってから9年の歳月が経過した。この現象については本誌9巻3号(1988)でレポートした。その後、両者がくりひろげる特異な行動についての観察、分析、調査結果が佐々木正己先生によってレポートされた(佐々木, 1992)。この現象を引き起こすと思われる「におい」物質についての分析研究の中間報告も山岡亮平先生によって行なわれている(山岡, 1992)。

開花期にニホンミツバチを誘引するこの種のランの原産地は長江南部、特に雲南地方だといわれる。ニホンミツバチと中国に飼れているトウヨウミツバチが同種であることは確認されている。ところで、手元にあるキンリョウヘンが中国にいるトウヨウミツバチも同じ様に誘引するのか。反対に、彼の地のこの種のランがニホンミツバチを誘引することができるのか。また、この種のランの原産地である中国南部、特に雲南の地に野生種は生存するのか。興味の種はつきることがない。

雲南行の準備をしていた1994年2月、吉田



図2 訪れた雲南地方の位置



図1 キンリョウヘン (ラン) に飛来したニホンミツバチの分蜂群

忠晴先生からランの本を頂いた。1993年北京の中国世界語出版社刊「三花」—中国兰科植物集锦—である。

キンリョウヘンの写真が掲げている。花名に多花蘭とある。学名は *Cymbidium floribundum* とある。しかし、この学名については *Cymbidium pumilum* だと筆者は承知している。そして解説に、又名蜜蜂蘭とある。強い衝撃波が体の中をかけめぐる。この呼び名が一般的に中国で使われているのだろうか。この名の由来はきっとこのランが直接的にミツバチを誘引するところにあるのだろう。

雲南に行ってこの種のランを見てみたい。トウヨウミツバチを見てみたい。できることなら雲南の地でこの現象を見てみたいという思いは年月の経過と共に強くなっていく。そして1994年5月、雲南行きを決行した。

彼の地のミツバチの反応を見るために、当地からキンリョウヘンの切花を30本持って行った。花を付けた茎を根元で切り一斗缶に入れた。いくらかでも長持ちするようにと遠赤外線放射綿を水と一緒に缶に入れた。まったく原始的なやり方である。

出発前に溶剤を使いランから出るとと思われる誘引物質を抽出することを考えたが、忙しさのためできなかった。

探査行のルートについては、はっきりとした予定は持っていなかった。雑誌「プランタ」に掲載された「雲南の植生(1・2)」(清水, 1989)と題するレポートを頼りに大理市に行くことにした。

## 1. 大理をめざして

5月18日、鹿児島県川内港より出港する上海行きの「新鑑真号」に乗り、上海に向かった。

5月20日、上海・昆明間2000kmを約3時間で飛ぶ。タクシーの運転手に頼み昆湖飯店に連れて行ってもらう。街へ出る。高く、大きな街路樹がすばらしい。北京路を昆明駅へ向う。途中双龍総合商場に入る。マーケットである。ミツバチに関するものを捜す。ショーウインドの中に「黒熊印」のハチミツがある。雲南名産とある。色が黒いのでトウヨウミツバチの蜜だろうか。雲南も南部地方の産物だろう。

5月22日、朝8時、大理・下関へ向けバスで発つ。400km、1日の行程である。

昆明バスターミナルを同時に2台の中型バスが出発する。道中片方が前を走り客を乗せ、もう一方がその間に先行するというを繰り返しながら進んで行く。

囲りの風景は赤茶けた土地で統一されている。田植の最中である。農機はほとんど見かけない。赤、白、青などの彩やかな色の衣装の女性の姿が目につく。人の数が多い。畑の横の雑草を豚に食べさせている人もいる。水田の中にクワイ（おもだか）の葉が目につく。

## 2. 大理・下関の「蜜蜂蘭」

4時大理・下関に着く。街中の感じが上海・昆明とは異なる。物乞いがいない。商人がうるさく声をかけない。旅行案内を頼りに「洱海賓館」に向う。20kg程のバックの重さが体にこたえる。

フロントの若い女性にランとハチのことを尋ねるが要領を得ない。ハチとランのどちらにも興味がなさそうである。実力不足の英語のせいばかりではなさそうだ。

持参した一斗缶入りのキンリョウヘンの切花も、くたびれて命を終えようとしている。思いきって処分することにする。海空陸3500km程の旅だったが役立つことはなかった。

ホテルの客の出入をチェックする公安関係の若い女性にも尋ねてみるが収穫はない。

横から英語で、困ったことがあったら何んでもどうぞと30才位の女性が話しかけてきた。

このホテルの2階に事務所をおく大理州洱海国際旅行社に勤める英語通訳の趙珍煜さんである。彼女の知人にランに詳しい人がいて紹介しましょうと言ってくれる。

23日11時、趙珍煜さんと約束した「洱海賓館」の前に行く。正面脇の服務員の事務所へ連れていかれる。広い落着いた部屋には若い男性3人と中年の女性がいる。

持って行ったキンリョウヘンの写真を見せる。「ミンフォンラン」と男性の一人がいった。この大理の地でもキンリョウヘンはミンフォンラン（蜜蜂蘭）と呼ばれているのだ。2月吉田先生から頂いた「三花」にあった蜜蜂蘭で一応の心がまえはできていたが、実際に聞いてみると感慨深い。色々の思いが脳裏を駆け巡る。キンリョウヘンはミンフォンラン（蜜蜂蘭）ということを知るために雲南まで来たようなものだったと思ったりした。

中年の女性が前庭あった植木鉢を持ってくる。キンリョウヘンだろう。葉の巾が狭いが野生味を感じる。ラン談義が長く続く。

洱海飯店の2階の国際旅行社の前のロビーで趙さんと話していると日本語で話しかけてきた人がいる。彼女が属する旅行社の社長の凌小榕さんである。元は給水設備の設計技師だという。独学で日本語、ロシア語、英語、ドイツ語、フランス語をマスターし通訳になったという。読んで、話せて、書けるというすごい方である。日本にも以前阪神の方に数年間住んだことがあるという。中国はもちろん日本の文学、地理、植物、動物のことも詳しい。日本語で突っ込んだ話ができるのが嬉しい。

中国、特に大理地方のミツバチ事情について尋ねる。大理郊外に感通寺という寺があり、その和尚さんがミツバチを飼育している。大理近くに住む人でハチミツが欲しくなったらそこへ出かけ手に入れるという。

そして大理からは大きく隔たるが迪慶藏族自治州の州都中甸がハチミツの産地として聞えているという。蜂児を焼いた名物料理があるという。蔵族とはチベット族のことである。

住民の大部分が蔵族と聞いて中甸行きを決め

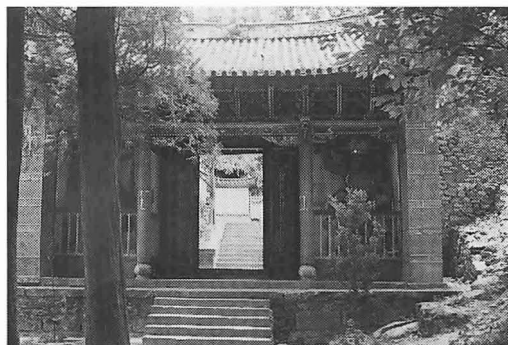


図3 感通寺山門

る。中旬での宿は迪慶州政府招待所が安全でよからうと教えて頂いた。

近くの山に入りたいとの希望は大反対である。危険であること、山に精通した人が近くにいないことである。迪慶州・西蔵省の州の省境に位置する梅里雪山(6740m)で日本の大学の登山パーティーが遭難し、遺体の収容も行なわれていないという。

### 3. 大理郊外の感通寺

5月24日、凌社長に手配してもらったタクシーで出かける。洱海の西岸を北上する。下関から10km程で大理旧市街に入る。有名な三塔も見える。

朝のチベットー昆明公路は賑かである。馬車あり、トラクターあり、トラックあり、自転車ありである。耕運機の後に野菜ばかりか5、6人も立せているのもある。ハンドルを取るのも困りそうな位荷物をのせた自転車、街の中心に近づくにしたいが喧騒はひどくなる。

公路の道脇に「感通寺」と大書した石柱が建っている。洱海を背にして山道にかかる。舗装は切れ、ゴロゴロの石が道にころがっている。大理石の石切場の跡が左右に見える。2km程登ると広い駐車場。洱海の遠望がすばらしい。更に上方に向けて石の階段がある。その登り口に感通寺の由来を長々と書いた掲示がある。理解できないのが残念である。

山門には左右に1対の仁王像を置いてある。山門の後の石垣の上にミツバチの巣箱が2箱置いてある。敷石を進む。土壁の内側には巣箱が4箱置いてある。内2箱は空箱である。巣箱は平板を上下・四方に打ちつけたもので屋根の

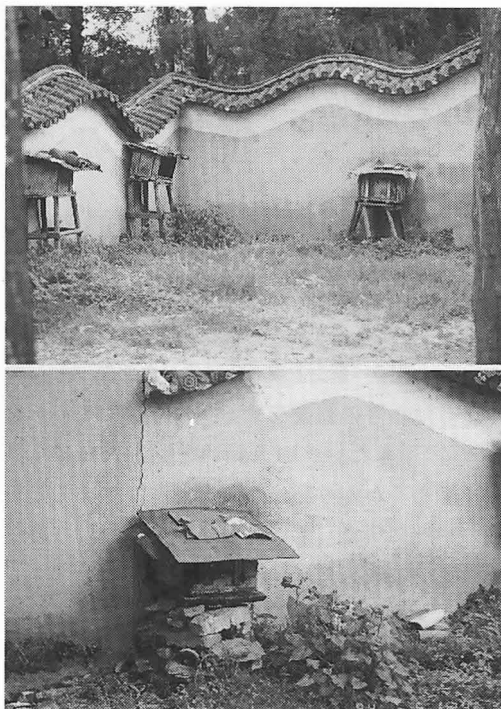


図4 感通寺境内の巣箱

部分にトタンをのせてある。

右手の階段を上り、中門をくぐると正面が本堂である。左手に講堂、右手に庫裏。講堂の二階にも巣箱が一つ。

剃髪をした青年僧が出てくる。20才前だろうか。運転手が来意を告げると中年の和尚が現われる。下働きをしているのだろうか老いた僧も現われる。講堂の前に置かれた椅子に腰を下し筆談を交えて話がはじまる。難しい内容になると運転手がくわしく聞いてくれる。和尚の名前は「傳正」といわれた。キンリョウヘンの写真を出すと青年僧が一言「ミンフォンラン」という。このランにミツバチが蝟集した様子の写真を見せる。青年僧がオーと声を出して指さした。そして本堂の前に並んだ鉢の中のキンリョウヘンの鉢を指さす。昨年この鉢にミツバチが来たという。本年は来なかったということだ。

このランの花にトウヨウミツバチが飛来して花粉交配した証拠にもなる結果したサヤは付いていない。この大理の地でこのランの花が開くのは2~4月だという。

傳正師に飼い方を尋ねると自然のままにとの答である。正に禅の悟りの境地である。

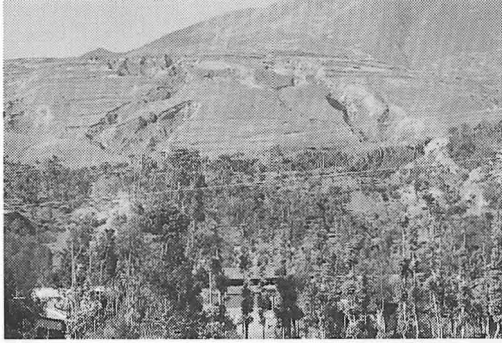


図5 蒼山の麓の丘に入った亀裂

少しばかりの喜捨をする。帰りがけにハチを20匹程頂きたいという願いを聞き入れてくれた。面布をかぶり箱に近づき、アジサイの葉を取り巣門に集まっているハチをすくい取ってガラスビンに収めた。

ニホンミツバチに較べ小型で、色は黒味が強い。性質はとても穏かである。天気も良く、気温も高いのに巣門から出入するハチの数は少ない。花粉を持ち帰るハチはほとんどない。箱の中を見たいとの筆者の願いは老僧の反対に合いかなわなかった。

スケジュールを時間より早く消化できたので蒼山に登ってもらいたいと運転手に頼んでみるが反対である。危険であること、道が悪いことがその理由である。

#### 4. 中甸を訪ねて

5月25日、朝7時中甸に向けてバスに乗る。

中甸まで300km、1日のバスの旅である。下関、大理の街を出ると喬木が両側に立つ道路を走る。長い長いトンネルの中を走るような感じである。チベットへ続く公路である。

左手には19の峰からなるという蒼連山が



図7 納帕海（中甸付近）



図6 玉龍雪山

30～40km程続いている。最高峰は4000mだ。因みに大理の海拔は2042mである。山にはいたる所に大きな亀裂が入っている。押し出されたまっ赤な土が扇状の地形を作っている。道の両側に大理石の加工場が点在する。

ガイドブックに使った「雲南の植生」の表現を借りるなら、この周囲の樹相は「貧相」の一言に尽きる。松を主に他は少しというところである。

剣川に入ると素焼きの鉢を作っている工場が軒を並べている。道脇に黒灰色の鉢を積み上げている。

道の両側では麦刈りと田植えが同時に行なわれている。そして刈り取った麦をアスファルトの舗装面に敷き詰め、通る車を利用して脱穀をしている。直っすぐに伸びたトンネルには視界の及ぶ限り麦を敷いてある。麦藁街道である。路端には農民が高帯を手にして立っている。それで麦藁を中央に寄せている。

迪慶州と大理州境の峠を下りはじめると右手前方に薄く雪山が見えてくる。玉龍雪山(5598m)である。写真では何度となく目にした山である。

麗江への分岐点白漢場で昼食を取るためにバスは一時間程止まる。食堂の横は広く視界がひろがっている。右手に玉龍雪山、左手に遠く哈巴雪山(5396m)。撮映に時間がかかる筆者にバスの運転手が食事を急ぐように促がす。食堂に入り先に食べている客の皿を指さして同じ料理を注文する。

この白漢場近辺の景観については吉野正敏編「雲南フィールドノート」に詳しく述べられて

いる。また古くはインド、ビルマ（ミャンマー）から雲南までの鉄道敷設のための実地測量を行なったイギリス人技師 H. R. Davies が1908年に著わした「雲南—インドと揚子江流域の環—」にも詳しい。さらにその後1913年イギリス人のプラントハンターの F. K. Ward によって著わされた「青いケシの国」にも詳しい。いづれの著者もこの白漠場で左右のコースをとっている。

現在は観光ルートとしてこの白漠場—石鼓—長江第一湾見物がとりあげられている。また右に麗江に向うコースも人気がある。

バスは北へ40km程坂を下り続ける。周囲は赤茶けた土を見せる松の疎林である。

ミルクコーヒー色の金沙江（長江の上流）の流れに左から青い清冽な水が流れこみクッキリと境目をつくっている。これから下流が虎跳峡である。小さな川に添って道は左カーブする。

この虎跳江で景観は一変する。バスは流れのきれいな小中甸川に添って坂道を上りはじめる。虎跳江の街に着く。チベット風の衣装をした女性が多数見える。独特のさがりの付いた四角のかぶり物を頭に乘せている。スカートは地をはくようなロングスカート。竹籠にひもをつけ、ひたいに当てそれに手を添えて買い物をしている。

峠を過ぎて景観は大きく変る。広大な草原が目の前に広がっている。数千kmにわたり続くチベット高原の最東南端に位置する平原を走ることになる。小中甸で初めてチョルテンを見かけた。塔の最先端からひもを下し赤や白い布を付けている。真新しいコンクリート製である。

雲が低くたれこめている。薄暗さを感じさせる頃中甸の街に着いた。迪慶藏族自治政府招待所に向う。受付に行くと英語の話せる青年をつれて来てくれる。チェックインをし、青年にミツバチのことを尋ねる。青年が明日勤めを休みガイドをしてくれるという。ガイドの件と車の手配を頼んでおく。

##### 5. 尼西のトウヨウミツバチ

5月26日、ガイドを頼んだ青年に会う「格桑」という名の21才のチベット族である。チ



図8 チベット族の尼西村

ベットに生れ、6才の時父親と一緒にインドのニューデリーに移ったという。そして昨年9月姉を頼って中甸に来たという。

バス停の前で格桑君の知り合いのタクシー運転手に会う。車は日本風の呼び方で軽のジープである。運転手の出身地にミツバチを飼っている所があるという。チベット公路を北へ向う。景観は昨日の続きである。

周りには大きな村が見当たらない。道路脇に秋ハギに似た花が咲いている。花の寸法、形からみてハチが来てよさそうな気がする。

30km程で尼西に着く。小集落がある。ここで運転手の知人をジープに同乗させることになった。尼西から左へ折れ坂を南に下り初める。知人は買物の帰りで乾うどんを手をしている。知人の住む村にミツバチを飼っている家があるという。南に場当りの良い斜面を標高にして200m程下る。20戸ばかりの家がまばらに点在する集落に着く。乾燥した石ころの多い土地である。傾斜した畑には野菜も見える。この谷を下れば金沙江に着くはずである。40km程隔てたところに対岸の山が連なっている。

新しい大きな構えの家の門前でジープが止る。頑丈な造りである。家というより小さな砦といった方が良さそうな感じ。小さなくぐり戸を入れる。中庭がかなりの広さである。ニワトリも飼っている。主屋で雑貨を売っている。

運転手とその知人が主人に来意を告げ、中庭の片隅で飼っているミツバチを見せてもらう。平板を上下四方に使った簡単な巣箱である。隙間を白い粘土で詰めてある。箱の上には麦藁を束ねて乗せてある。



図9 ニ西村のミツバチ

小型のハチである。色も黒い。巢門からの出入も少ない。穏やかなハチである。

主人に頼んで20頭程サンプル用に貰う。出入が少ないので面布を使って集めるが時間がかかる。巢門に麦藁を突っ込んでみるが反応がない。

例のキンリョウヘンの写真を出して尋ねてみるが知らないという。

中旬に帰り中西菜店で遅い昼食を格桑君と取る。メニューの中に「HONEY TEA」とある。尋ねると、ハチミツ入りの紅茶だという。蜂蜜を見せてもらう。トウヨウミツバチの蜜である。ミツバチを飼っている所で買ってきたという。

## 6. おわりに

キンリョウヘンとトウヨウミツバチを求めた旅も終わった。

成果は聞かれるなら、少なかつたとしか答えられない。

分かったことといえば雲南の地では、トウヨウミツバチが各地で点々と飼育されているということぐらいだろうか。

フリーランサーの単独行には制約が多すぎるようだ。行動範囲が狭く、行動の速度が遅いことは調査行には直接的に成果を小さいものにしてしまう。

帰りついた直後には多少恐い目に会ったことを思い出し二度と中国には行くまいと考えていた。しかし時間が経つと簡単に考えが変わってしまった。そして現在はやり残した宿題は早めに解決したいと思っている。

旅行中、準備の不足が悔やまれてならなかつ

た。Daviesの「雲南」を、地図を横において精読すべきだった。Wardの「青いケシの国」を、植物辞典を横において精読すべきだった。そして溶剤を用いてキンリョウヘンの花の臭い物質を抽出して持って行くべきだった。

できるだけ早い機会に雲南に野生のミンフオンランを捜しに行きたいと思っている。

この旅行にあたり多くの方々から温い、貴重な教示を頂いた。

東アジア野生生物研究会代表森和男、(株)ニコニコ堂白学沢、上海同济大学長宗勇、雲南省大理州海外旅游公司社長凌小榕、同公司趙珍煜、玉川大学ミツバチ科学研究施設助教吉田忠晴の諸兄、姉、先生方には重ねてお礼を申し上げたい。

またこのレポートの発表をする機会を与えて頂いた玉川大学ミツバチ科学研究施設に厚い感謝の意を表わしたい。

(〒869-51 八代市二見下大野町1920)

## 主な参考文献

- Davies, H. R. (田畑久夫他訳). 1989. 雲南. 古今書院. 東京. pp. 550.
- 福田道弘. 1988. ミツバチ科学 9(3): 127-130.
- 楊 增宏ほか. 1993. 兰花—中国兰科植物集锦一. 中国世界語出版社. 北京. pp. 188.
- 佐々木正己. 1993. ミツバチ科学 13(4): 167-172.
- 佐々木正己 (酒井哲夫編) 1992. ミツバチのはなし. 技報堂出版. 東京. p. 68-74.
- 清水善和. 1989. プランタ 2: 8-15.
- 清水善和. 1889. プランタ 3: 54-60.
- 田中 肇. 1993. 花に秘められたなぞを解くために. 農村文化社. 東京. pp. 174.
- Ward, F. K. (倉知 敬訳) 1975. 青いケシの国. 古今書院. 東京. pp. 363.
- 山岡亮平 (川那部浩哉監修, 井上 健・湯本貴和編). 1992. 昆虫を誘い寄せる戦略. 平凡社. 東京. p. 183-206.
- 山岡亮平. 1993. 科学朝日 53(12): 15-16.
- 吉野正敏(編). 1993. 雲南フィールドノート. 古今書院. 東京. pp. 244.